

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22610022

研究課題名（和文） 育児をめぐる迷惑意識が母親の育児不安・出生意欲に及ぼす影響に関する研究

研究課題名（英文） the Influence of Consciousness of Causing Annoyance in regard to their Childrearing to Child-Rearing Anxiety and Desires to Have Children

研究代表者

中谷 奈津子 (NAKATANI NATSUKO)

大阪府立大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：00440644

研究成果の概要（和文）：

本研究でいう「育児をめぐる迷惑意識」とは、社会全体が抱きがちな育児に対する迷惑意識のことをいう。「育児をめぐる迷惑意識」の実態と形成要因、またその意識が育児を担う人々に与える影響について明らかにし、育児不安や出生意欲との関連も検討した。自分の子育てについて、配偶者や祖父母、迷惑をかけたと回答するものは多く、職場や公共の場での迷惑も指摘された。育児をめぐる迷惑意識は、育児不安や出生意欲と関連しており、育児をめぐる迷惑意識を規定する要因として母親規範意識や世間の目が考えられた。

研究成果の概要（英文）：

In this study, it is defined as “Consciousness of causing annoyance in regard to their childrearing” that people feel an annoyance about someone’s parenting in the society and parents feel guilty for others about their own childrearing. The purposes of this study were to grasp whether parents who are childrearing have the consciousness of causing annoyances in regard to their childrearing, if so, when they did it, and what factors were related to the consciousness. Additionally, we also considered the relations between the consciousness and their child-rearing anxiety or desires to have more children.

Nearly half of the subjects have had the experience of causing an annoyance to their partner, their own parents, and the people in their companies or in public. The consciousness of causing annoyance in regard to childrearing seemed to be related to their child-rearing anxiety and desires to have children. The personal factors that seem to influence the consciousness of causing annoyances seemed to be mother normative consciousness and by the public.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：子ども学（子ども環境学）

キーワード：育児、社会的迷惑、育児不安、出生意欲、ジェンダー、労働

1. 研究開始当初の背景

本研究でいう「育児をめぐる迷惑意識」とは、「こんなところに子どもを連れてくるなんて」「子どもを理由に仕事途中で帰る母親は困る」などといった、社会全体が抱きがちな育児に対する迷惑意識のことをいう。

現代の育児を取り巻く生活は、母親にとって非常に厳しいものであると思われる。子どもを誰かに預け、自分自身の時間をもつことも困難な状況にある母親も多く、父親が育児に関わらない家庭では、母親は育児不安を高め、夫婦関係にも溝が生じている。その背景には、我が国に根強い母性神話や性別役割分業意識に伴った、子どもを母親以外の誰かに託すことへの「迷惑意識」、子どもを母親以外の自分に託されることへの「迷惑意識」が存在しているものと思われる。社会全体の中にある「育児をめぐる迷惑意識」が、育児期にある人々を抑圧し、排除している可能性もある。人々の抱く「育児をめぐる迷惑意識」は、直接的にも間接的にも子どもを産み育てにくい社会を構築し、結果としてわが国の少子化を進行させていると考えられる。本研究において、「育児をめぐる迷惑」に関する意識の実態把握を行い、その要因や影響が明らかにされることによって、今後子どもを産み育てやすい社会、ワーク・ライフ・バランスが可能となるような社会を目指して、具体的な目標や方策などを設定することが可能になると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、これまで蓄積されてきた育児不安研究、育児ネットワーク研究を踏まえた上で、「育児をめぐる迷惑意識」の実態と形成要因、またその意識が育児を担う人々に与える影響について、特に母親の育児不安や出生意欲の観点から明らかにすることを目的としている。

具体的には、第一に、既存の育児不安研究、育児ネットワーク研究、ワーク・ライフ・バランスに関する研究を踏まえた上で、育児をめぐる迷惑意識について確認すること。第二に、それらの迷惑に関する意識が、どのような要因によって形成されたのか確認すること。第三に、それらの迷惑に関する意識が、どのような事柄に影響を及ぼしていくのかについて検討すること（例；現在の育児不安、今後の出生意欲等）である。

3. 研究の方法

(1) インタビュー調査

大阪府、高知県内の子育て当事者、及び子育て当事者以外の人を対象に、インタビュー

調査を行い、具体的な育児をめぐる迷惑意識の内容と形成要因について把握した。

(2) 質問紙調査

インタビュー調査をもとに、質問紙調査票を作成し、大阪府内の保育所及び地域子育て支援センターに協力を得て、大阪府内の乳幼児を持つ保護者を対象に質問紙調査を実施した。643票の回収を得た。

4. 研究成果

(1) インタビュー調査から得られた知見

インタビュー調査から特に子育て当事者に関する結果のうち、公共の場に関する内容について整理し、育児に関する迷惑意識の具体的内容とその関連要因について考察した。

育児に関する迷惑につながりやすい要因として、場所をとる、子どもの声や音、子ども特有の行動、危険行為などの不適切な行動があげられ、迷惑をかけやすい場所として、商業施設や公共交通機関だけでなく、マンションなどの居住空間、子どもの遊び場、歩行時の道路などもあげられた。

周囲からの批判の目を気にする回答もみられ、保護者には内在化された親責任の強さがうかがわれた。

迷惑回避の行動として、子どもをじっとさせるなど子ども自身の行動を制限する、外出しない、公共交通機関に乗らないなどの親子の行動を狭める内容も指摘された。

子育ての迷惑意識の形成要因としては、年齢や育児の経験、共感性といった個人的要因だけでなく、社会全体の親役割への期待の強さ、人付き合いの希薄化した社会背景などもうかがえた。

本結果は、国際家政学会 2012 において発表している。会場では、日本の子育てのしにくさの現状や出生率との関連などについて、多くの質問や意見を得た。

(2) 質問紙調査から得られた知見

インタビュー調査をもとに、質問紙調査を実施した。調査項目は、自分の育児で迷惑をかけた経験、他者の育児で迷惑をかけられたと感じた経験、育児不安、次子の出生意欲などである。

質問紙調査の結果の概要を以下に示す。

① 回答者自身の子育てについて

「配偶者に迷惑をかけた」について「よくある」「時々ある」は 40%、「妻方の祖父母に迷惑をかけた」は同 64%、「夫方の祖父母に迷惑をかけた」31%、「職場への迷惑」55%、「電車やバスなどでの迷惑」36%、「デパートやレストランで迷惑」54%、「子どもの遊び場での迷惑」30%という結果となった。自

由記述においては、「配偶者に迷惑という質問の意味が分からない」「夫婦で子育てと考えると、お互い支え合い」という記述がみられる一方で、「迷惑をかけた」と感じている回答者が多くみられた。

② 他人の子育てについて

「職場で迷惑に思った」について、「よくある」「時々ある」は16%、「電車やバスで」は同38%、「デパートやレストランなどで」44%、「子どもの遊び場や公園などで」40%という結果となった。回答者自身の子育てとの比較から、他者の子育てに対して迷惑を感じる割合は相対的に低くなっている。また、職場での迷惑よりも、公共の場で迷惑を感じる割合が高くなっている。

③ 育児不安との関連

育児不安項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行ったところ、3因子が抽出された。第1因子を「育児の抱え込み」因子、第2因子を「子どもからのストレス」因子、第3因子を「生活のゆとりのなさ」因子と命名した。それぞれの因子における因子得点を算出し、育児をめぐる迷惑意識との関連をみた。

「育児の抱え込み」得点は、自分の育児についてではなく、他者の育児を迷惑と認知することと関連した。他者の育児に関して「職場で迷惑」をかけられた、「子どもの遊び場や公園で迷惑」をかけられた頻度が高いと感じている群は、育児の抱え込み得点は高い結果となっている。

「電車やバスなど」「デパートや商店など」「子どもの遊び場や公園など」で、自分の子育てで周囲に迷惑をかけたと感じる頻度が高い群で、「子どもからのストレス」得点が高い結果となった。周囲に迷惑をかけるといったことを経験しやすい背景には、そもそも子どもが活動的であったり、子どものエネルギーを発散しきれない育児環境や生活があったりするのではないかと推察された。

「妻方の祖父母への迷惑」「夫方の祖父母への迷惑」「職場への迷惑」頻度が高い群で、「生活のゆとりのなさ」得点が高くなる結果となった。恐らく共働きの家庭やひとり親家庭など生活に時間的なゆとりがない家庭であると考えられ、祖父母の協力を依頼することが多いものと思われた。

④ 出生意欲との関連

「もう一人（以上）子どもがほしい」という次子の出生意欲との関連をみた。「自分の子育てをしていて、配偶者（パートナー）に迷惑をかけた」頻度の高いものが、次子の出生意欲が高い結果となった。

また、子どもの遊び場や公園などで、他者

の育児を迷惑に思うことが「全くない」群で、次子の出生意欲が高く、「よくある」群で出生意欲が低いことが明らかになった。

⑤ 迷惑意識の形成要因

迷惑意識の形成要因として、母親役割規範意識を取り上げた。「母親は自分の楽しみのために、もっと子どもから離れる時間をもってもよい」という意識について、「思わない」「あまり思わない」群は、電車やバスでの迷惑得点が低い。また、「しつげがなされていない等の子どもの問題は、母親の責任である」という意識について「思う」群は、電車やバス、デパートや商店、子どもの遊び場での迷惑得点は低い。このことから、母親役割規範意識が強い人は、他者へ迷惑をかけないように、外出を控えたり、行動を制限したりするなどして、自分たちの行動範囲を狭めているのではないかと考えられた。

また、「周囲の人が、自分の子育てをほめたり、批判したりするのが気になる」という、いわゆる世間の目を気にする群においても、夫方の祖父母、職場、電車やバス、デパートや商店、子どもの遊び場における迷惑意識を強めていることが明らかになった。また、世間の目を気にするものは、他者の子育てへのまなざしも厳しくなる傾向にあった。

（3）本研究のまとめ

本研究から、自分の育児について迷惑をかけたと感じるものは少なくなく、夫や自分の親、職場、デパートやレストランなどの公共の場でも迷惑を感じる傾向にあった。また、同じ子育て当事者であっても、他人の育児について迷惑に思うものあり、デパートやレストラン、電車やバスの等の公共の場だけでなく、子どもの遊び場といったところでも、迷惑と感じる傾向にあった。

育児をめぐる迷惑意識は、育児不安や出生意欲と関連し、育児をするものの行動範囲を狭めているのではないかと推察された。また育児をめぐる迷惑意識を規定する要因として母親規範意識や世間の目が考えられた。

（4）今後の課題

当初は、子育て当事者以外の人をも調査の対象とし、社会全体の子育ての位置づけを確認しようとするをも研究目的としていた。しかし、研究体制の不十分さや研究期間の限界などから、インタビュー調査のみ子育て当事者以外の人をも対象とすることとなった。今後はさらに対象を広げていくことも求められよう。

また、「迷惑意識」についてたずねている項目が、対象者には伝わりにくかった部分もあるのではないかと考えられた。項目によっては、意識について答えられていたり、実態に

ついて答えられていたりすることも考えられる。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 森田美佐、日本の母親の「子育ての負担感」と社会環境、高知大学教育学部研究報告、査読無、第72巻、2012、131-135
- ② 森田美佐、「子育て支援」はもう十分か?、高知大学教育学部研究報告、査読無、第71巻、2011、187-196
- ③ 森田美佐、日本の子育て支援とマザーハラスメント、高知大学学術研究報告、査読無、第59巻、2010、155-164

[学会発表] (計2件)

- ① 中谷奈津子、Why do Japanese mothers feel so guilty for people in public?、International Federation for Home Economics XXII、2012年7月18日、Melbourne
- ② 森田美佐、家庭科における「子育てしやすい」社会に向けた学びに関する研究、日本家庭科教育学会、2011年11月12日、聖心女子大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中谷 奈津子 (NAKATANI NATSUKO)
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：00440644

(2) 研究分担者

森田 美佐 (MORITA MISA)
高知大学・教育学部・准教授
研究者番号：20403868

(3) 連携研究者

なし